

(24)空洞化する中心市街地での買い物

最近になって、新潟に住んでいる義姉から電気製品を買い換えたという知らせを受けた。何でも、70歳を少し過ぎていて1人住まいの上、リウマチを病み手足も不自由ということがあって、現在使っている電気製品が故障した場合も買い物に出かけることができず、かといって修理を頼める先もないことから、冷蔵庫、洗濯機、TV、電話等を一新したというわけである。

義姉が住んでいるところは、郊外に大型店ができたこともあって中心市街地の空洞化が進み、商店街が衰退して、いわゆるシャッター通り化している典型的な地域である。こうした地域では、車の運転ができない高齢者は買い物も自由にできないということらしい。また、商店街にあった電器店は消滅したのでも容易に修理に来てもらうこともできない。さらに、中心市街地の空洞化によってバス便も減少し、旧市内に住む高齢者にとっては病院に出かけるのも困難になっている。新潟特有の雪空を思いつつ、気持ちが滅入る話であった。

そこで、電気製品をすべて買い換えたというわけであるが、結構使える電気製品は一体どうなるのか。リサイクルや中古品として再使用することは可能であろうが、物を大事に使う、あるいは物に愛着を覚え、修理をしながらできるだけ長く利用するという考え方には反するものであろう。一方、新製品は省エネ型のものが多いので、環境配慮の点から見れば、買い換える方がよいのかもしれない。

新潟の義姉の話は、地域社会から徐々に疎外されていく高齢者の買い物行動の特徴を示しており、その買い物行動にも環境配慮がどのように関わっているかを考えさせられる、少々やるせないものであった。

以上